

エミは自室に入ると、光とともに現れた大きな白いクロコダイルの頭を撫でた。

「アガレスたたいま」

『おかえり。今日は学校ではどうだったか？』

アガレスのその言葉を聞くとエミはため息をついた。

「体育が面倒だった。今日はプールだったんだけど泳ぐのってめんどくさい」

アガレスはゆっくりとした動きでしゃがんでいるエミの頭を口で撫でた。

『お前は運動が苦手だからな。しかしある程度運動をしなければ太ってしまうぞ？』

「え？ママは私の年じゃまだ太らないから安心しろ。っていう」

『それは遺伝的なこととして言っているのか？』

「うん。ママも若い頃は太っていなかったらしい。アガレスは私が太るのは嫌？」

『太るのが嫌というか、同じクラスにいるハナエという奴と同じ体型にはなあって欲しくないな』

「ああ。ハナエちゃんはね・・・」

『あれは小さい頃から太っているのか？』

「多分。急にああいう体型になっているわけではないと思うよ？」

『なるほど』

アガレスがそういうと再びアガレスの体は光に包まれた。

エミの目の前には白いスーツに体を包んだ長身で長髪の美しい若い男が現れた。

髪は真っ白で目は燃えるように赤い。

「アガレスって老人って話じゃなかったっけ？」

「あれは召喚者が見た幻覚だ。っていつも言っているだろう？」

「なんで召喚者はアガレスが老人に見えたんだろう？」

「召喚者が老人だったからじゃないのか？それよりエミ、今日の英語はどう

だ？」

エミはアガレスにそう言われると少し考えた。

「アシスタントティーチャーに難しい宿題出されたから教えて」

「どれだ？」

宿題が終わった後、エミは部屋着にしているスエットに着替えてアガレスのひざの上に頭を乗せたまま本を読んでいた。

エミが本から目を外し上を見れば、自分と同じように読書をするアガレスの姿があった。

「なんだ？」

エミの視線に気が付いたアガレスが視線を下に向けると、エミはふふと嬉しそうに微笑んだ。

「だってー、アガレス超イケメンなんだもん」

「俺みたいなのは魔界じゃ当たり前だといつも言っているだろう？」

「えー？でも超イケメン。ねーアガレス、この間ね、英語の担任から市の英語作文コンクールに応募してみないか？って言われたー」

「市の英語作文コンクール？」

「あのね、英語で作文を書いてみんなの前で発表するの。テーマは自由らしいんだけど、優秀作品に選ばれれば内申書が良くなるんだって。あたし応募した方がいいかな？」

「内申書っていうのは、確かお前が学校で何をしていた？とか、どんな名誉を得たか？というのが書かれる奴だったか？」

「うん。内申書が良いと大学受験が有利になる」

「応募した方がいい。そこで最優秀者となればさらに俺の恋人としてふさわしい奴になる」

「そうなの！？」

エミはガバっと体を起こすとアガレスの前に顔を近づけた。

「でも自分の力だけでやるんだぞ？」

「えー？アガレス手伝ってくれないのー？」

エミが駄々をこねるようにそういうと、アガレスはエミの鼻を指で軽く押した。

「何年お前に英語を教えていると思ってるんだ？」

「んーとね・・・多分3年？」

「そう、3年だ。お前が中学生の頃から教えているが、この間お前は英語の成績がメキメキ良くなって、英文科に進学もしたな？」

「うん」

「大学も英文科に進みそうで、将来的には外資系も夢じゃないとか言われているな？」

「うん」

「なら、たまには自分の力でやってみろ」

「・・・はあい！」

エミは少しぶーたれたが、納得したようにそういうと再びアガレスのひざに寝転がった。

「ねえアガレス。アガレスって人間の形になると人間の男の人と同じになるの？」

「なぜそれを聞く？」

「・・・興味？」

アガレスはエミが人間の男に興味を持っているのを思い出すと小さくため息をついた。

「大体は人間の男と同じ形になる。しかし相手によって形を変えるから、必ずしも人間の男と同じとは限らない」

「・・・それって、今はあたしにあわせている。ってこと？」

「ああ。はつきり言えばそうなるな」

「ねえねえ、例えばどこなところが私にあわせているところなの？」

エミはそう言いながらアガレスのひざの上に座ると興味深げにアガレスの胸元を見た。

アガレスはエミの目が好奇心に染まり始めたのを見ると呆れたようにため息をついた。

「お前、俺に服を脱げというのか？」

「え！？この服脱げるの！？」

「まあ・・・」

「脱いでみて！マジで脱げるのか見てみたい！！」

アガレスは無邪気な好奇心に抵抗する事ができない自分のため息をつくとき、まるで少女漫画の主人公の要望に付き合う年上の男のような気分になりながらジャケットを脱いでみせた。

「ほら。実際に脱げるだろう？」

「本当だ！・・・ねえ、確かここってこんな風にしてずらすんだっけ？」

エミの手はアガレスのネクタイの結び目にかかり、左右に揺らしながらほどこいて行った。

「取れた！」

アガレスは自分も制服でネクタイを使うのに何を。と思っていたが、無邪気な笑顔で喜ぶエミの態度にまんざらでもない気分になっていた。

「ねえアガレス！シャツ脱がせてみていい？」

「勝手にしろ」

「わーい♪」

エミはアガレスが抵抗しないのを良いことにシャツのボタンを次から次へと外していき胸元をほだけさせた。

「アガレスって凄い筋肉質だったんだ……。ねえ、これももしかしてアガレスの世界では当たり前なの？」

「ああ。男は大体こんな体だ」

「・・・そうなんだ・・・」

ため息をつくような、うっとりとした言い方にあアガレスはチラッと視線をエミの方に向けた。

案の定、エミはアガレスの体に抱きついていていた。

「ねーねー、一体いつになったら彼女にしてくれるのー？」
エミの言葉にアガレスは呆れたようにため息をついた。

「18歳になったらといつも言っているだろう？」

「後一年もかかるのかー。ねえねえ、なんでいつも18歳になったらなの？成人年齢になるから？」

「それだけじゃない。霊能力が開花する時期でもあるからだ」

「えー？私って霊能力あるの？」

「当たり前だ。今は自覚がないだろうが、霊能力がない人間には一緒に暮らそうなどとは言わない」

「そうなんだ・・・」

「エミはどうして俺に恋人として扱ってもらいたいんだ？」

「だって、アガレス凄くカッコいいし。一緒にデートができればすごく良いだろうなー。っていつも思っている」

「お前は人間の男に興味はないのか？」

「人間の男？」

「ああ。俺のような悪魔に興味を持つ前に、人間の男に興味を持つべきだろう？」

アガレスがそういうと、エミはアガレスの胸板に甘えるように顔をこすりつけた。「人間の男なんてつまんないよ。アガレスよりイケメンなんていないし、こんな風に分かるまで英語を教えてくださいな」

「俺は英語以外でお前に教えられないことはないぞ？」

「でも、アガレスは日本語以外なら全部教えられるんでしょ？」

「まあな。日本語に関しては勉強中だが、それ以外の国なら行ったことがあるから大体は分かるぞ？」

「知っている。この間中国語とかも教えてくれたよね。あれ凄く助かったし、これからも教えて欲しい」

「中国語に興味を持ったのか？」

「違う。中国語と韓国語ができれば就職先が広がるし、いろいろな人とも知り合えるから教えてもらいたい」

「お前はつくづく語学に関して興味関心が凄いな」

アガレスが感心したようにエミの頭を撫でるとエミはにこりと微笑んだ。

「だからその・・・英語以外も教えてもらいたいな・・・って思っている」

「英語以外？例えばなんだ？」

「えっと・・・キスとか・・・その先とかも・・・教えてもらえたら嬉しいなーって思っている」

エミの言葉にアガレスは少し考えると、エミのあごを軽く指先で上向かせ軽く唇を重ねた。

「こういうことか？」